

2017年10月31日（火）19～21時@ヒカリエ8F/COURT

都市想像会議

第11回「ネイチャー×都市」

都市と自然の新しい関わり方はあるか？

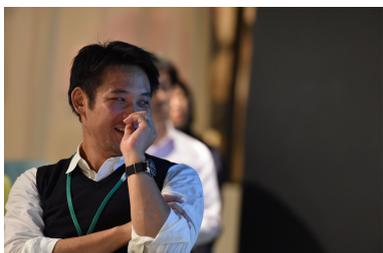
登壇者：



左：石川 初（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科／環境情報学部教授）

右：倉澤 聡（都市計画家）

ファシリテーター：



左：左京泰明（シブヤ大学学長）

右：紫牟田伸子（編集家／プロジェクトエディター／デザインプロデューサー）

紫牟田：みなさんこんばんは。今日は「ネイチャーと都市」というお題です。「都会の自然とどう付き合っていくといいのか」ということをテーマに、ゲストに石川初さんと倉澤聡さんをお迎えして話していきたいと思います。進行は私、紫牟田と左京が行います。よろしくお願ひいたします。

さて、今日は都会の自然というものを考えてみようという回ですので、最初にいくつか都市の自然を見てみようと思います。都会にはいろいろな自然がありますよね。例えば、渋谷には明治神宮がありまして緑豊かです。生活が自然と一緒にあるといいなと思う一方で、自然と対応するのはものすごく手間がかかったりします。住宅地を歩くとあちこちに鉢植えがありますよね。言ってみれば自然がないから自然を切り取って置いていく、みたいなやり方ではないでしょうか。

石川：アロエとローズマリーが並んでいるのがいいですね。

紫牟田：そうお？

石川：なんかこう、その、わざとらしさがないじゃないですか。緩さがね。



左から、空から見た明治神宮の森（ネットより）、住宅地の植木鉢、駅前の造園

紫牟田：もう少し目線を引いてみると、都市計画の中に植栽計画があつて木が植えられている。緑の計画はされていますが、こういう自然と私たちはお付き合いしているのか、していないのか……みたいな場所がいっぱいあるなと思います。なにが言いたいかというと、私たちは自然と付き合いながら楽しんでいたりしている。でも一方で管理される自然もある。さまざまな付き合い方をマクロにもミクロにもいろいろ考えなくてはいけない状況があるのではないかと思います。

石川：テーマがでかい！

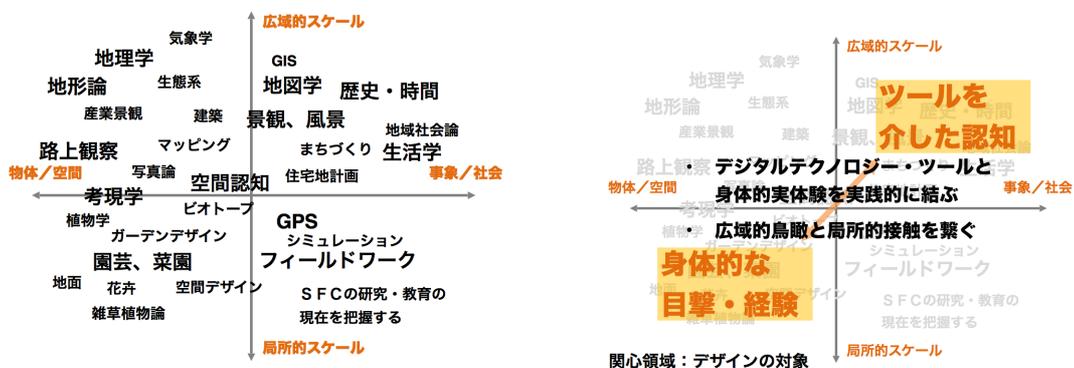
紫牟田：そうなんですよ。というのも、いま自然をどう切り取ったらいいのかという取り付き方もよくわからないな、と。私たちに出来ることがあるのかもしれないし、みんなで考えたほうがいいのかなということもあるかもしれない。どういう取り付き方があるのかを見つけないかと思っています。今日はどう進めていったらいいのか悩みつつなのですが、まずは石川さんと倉澤さんにご自身がどんな活動をされているのかをお話いただいた上で、絞りながら進めていければと思っています。それでは、石川さんからお願いします。

スケールを行き来する

石川：私はいま慶應義塾大学湘南キャンパス（SFC）で教員兼研究をしているんですが、大学は造園学科出身でして、20数年間ゼネコンの設計部やランドスケープのデザイン事務所にいました。これまで中野駅前とか集合住宅の外部空間とか、商業施設の庭とか屋上とか、ジャカルタの複合商業施設とか大崎駅前とか、でかいものばかり設計していました。一方で設計に止まらずいろんなことをしていました。

ご縁があつて2015年にSFCに移りまして、研究室にタイトルをつけて下さいと言われてたんですが、「どうしよう、造園じゃないし、なんだろう？」と思って、地上のこと考える学問ということで「地上学」ってしたんだけど、「地上学」という学問がないので、「『地上学』に”向かって”研究します」としました。

もともと専門がランドスケープデザインですけど、これ（下）は、学生に「石川研って何やっている



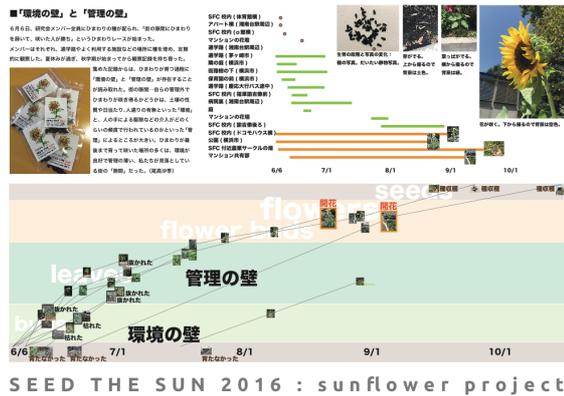
資料提供：石川 初

かわからない」って言われた時にこういうふうにごうえろ、っていうマニュアルです。このようにいろいろなスケールに渡って興味があつて、それを主にツールを使ってどのように身近なものごう域的なものを結びつけるかをやっています。

いま30人ぐうりの学生がいます。SFCって結構、実力をコミュ力で乗り切ろうとするので、「プレゼンはい訳で始めてはいけない」とか「自然とかコミュニティとか言うな」とかいう禁止事項があつて、停電になつても手で図面を描いてプレゼンできるように練習する「24時間耐久ドローイング強化合宿」とか、月1〜2回フィールドワークをしていたりします。時々、その場にあるものを使って即興でアートワークをつくる、通称「アンディ・ゴールズワージーごっこ」をしたり、それからこれ（下2点）はグループ課題で、夏休みの前に一人10粒づつぐうり配られたひまわりの種ををまちの自分の好きな場所に蒔いて、咲いたら勝ち！という「ひまわりレース」です。下手なところに蒔くと芽が出ない。場所のリテラシーが問われますね。ちゃんと芽が出ても環境の壁とか管理の壁とか、

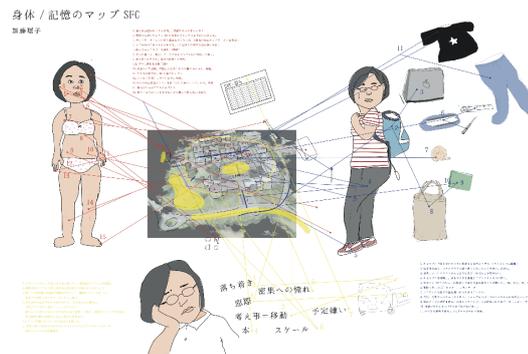
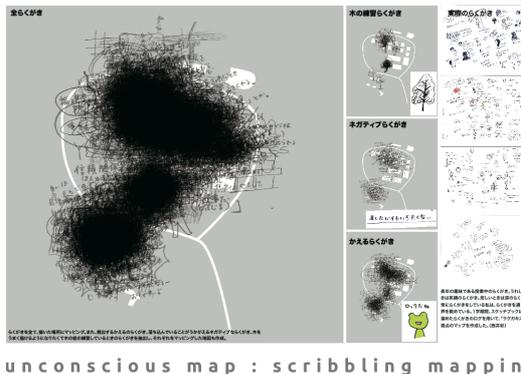


ヒマワリレース：街にヒマワリを蒔いて、咲いたら勝ち



資料提供：石川 初

いくつも壁があつて、2つぐうりしか開花しなかつたんですけど、結局、都市に蒔くと自然だけでなく、ある程度までいくと社会を相手にしなきゃいけない。どういふふうにごう社会に寄生するかをうまく切り抜けたところで花が咲いて、実際に収穫するまでいっごう答えが2つぐうりありましたね。夏に研究室のメンバー全員に絵葉書を書かなきゃいけないというチェーンメールみたいな課題もあります。全員のところに絵葉書がくるので、なんとなく大学生の夏休みみたいなものが浮かびあがつてくる。これは楽しかつたですね。傑作が結構あるんです。それから新しく研究室にきた学生には自分にしか描けないキャンパスの地図を描いてもらつて、新任の教員にSFCってこういうところですよって教える課題を出したんです。落書きでカエルを描く子がいて、キャンパスのどこでどういふカエルを落書きしたかをマッピングしていたり（下左）、自分の体の虫刺されや傷、最近太つたなど自分の特徴はすべてキャンパスで起きたことなので、それをキャンパスの上にマッピングすることが出来る——つまり自分の体はキャンパスであるという地図（下右）



キャンパスの地図（左：西井彩 右：加藤遥子） 資料提供：石川 初

もありますね。生協で買って来た油っぽいものを食べている奴が、どこで主にどんなものを食べているかをカロリーのヒートマップをつくって立体にした地図もあります。

こういうのをつくってなんの役に立つのか、という自分自身の問いを乗り越えるのが、最初大変なんです。そこで乗り越えられないと辞めていくんです。それを乗り越えて「そんな問いを立てなくていいんだ」と悟ってしまう学生はこの先続いていける感じですね。

四国の香川出身の子が地元の巨大モールとSFCがそんなに大きさが変わらないと気がついてショックを受けて、SFCで世界を測るという地図をつくっています。そうすると、モン・サン＝ミッシェルとだいたいゾーニングも大きさも一緒とか、マチュピチュとか意外なものが浮上するんですよ。仁徳陵もありますね。やっぱ仁徳陵はでかいですね。人数的に言うところちは5,000人であつちは1人、みたいななかなか面白い地図ができました。

GPSで地図を描くという取り組みをした学生もいます。GPSを持って自分の出現頻度をプロットしていった出現頻度が高いという地形図を描いた。この子と会いたくなかったら谷間に行けばいい、みたいなこともわかったり……（笑）。キャンパスとキャンパス周辺の駐車場に駐車している車の新車価格を割り出した学生もいます。そうするとキャンパス内の教職員の駐車場とキャンパスの周りにある学生の駐車場では新車価格では200万くらい差があることがわかった。学生が運転してくる車のほうが高いんです、SFCは。大学が金を払っている人よりも慶應大学に金を払っている人の方がお金持ちだという身も蓋もない地図ですね、これは（笑）。これも面白かったですね。

このように非常に特徴的なキャンパスで、すごく記号的な形をしているので、これまで発表された地図を洗い出してみると、何が強調されているかがわかるじゃないかと思って、それを総合してどこまで単純化してもSFCに見える地図をつくったんです。一応いろいろやってこれが我々が到達した最もシンプルなSFCの地図で、SFC出身者はこれを見るとSFCだとわかるんです。

SFCのキャンパスは楨文彦さんがデザインされた典型的なモダンランドスケープなんです。モダンランドスケープというのは、イギリス風景式庭園の直系の子孫なので、キャンパスをイギリス風景式庭園をつくったウィリアム・ケントが18世紀に描いたように描けるんじゃないかということを考えて、ウィリアム・ケントが描いたと考えられるキャンパスの絵というのを描いた子がいるんです（下左）。絵が上手な学生で名前がたまたま「けん」というんです。だから、彼はウィリアム・ケントと呼ばれるようになった（笑）。

だったら、これを東洋のやり方でもできるんじゃないかと思った書が得意な学生がいて、山水画でSFCを描いた（下中）。そうすると面白いのが、ウィリアム・ケントだこのまま描けるんだけど、後ろの建物がクラシカルになっていますが、山水画の技法で水があるところは大体花崗岩質なので岩場なんです。なので、「先生、どうしても水辺が岩になってしまいます」って（笑）。いかに芝生が水に接していることが西洋的な親水のあり方なのかということが、逆にこういうことを描いてみることでわかってくるということですね。すごく面白い。彼女はこれをそのまま続けていて「SFC八景」というのを描くって言っています。

日本史ファンの子は江戸切り絵図の図式でキャンパスを描きました（下右）。これも詳しく話すとい

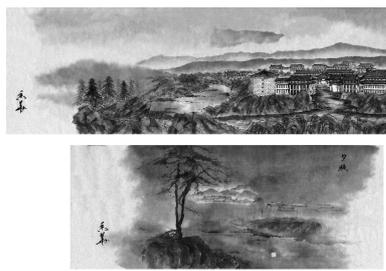


■キャンパスを象徴する
SFCのシンボルマークとして、緑色の円の中に、白い本と青い眼鏡の形を組み合わせ、SFCの頭文字を表現しています。

資料提供：石川 初



■自然風景を背景としたSFC



ansui-ga as SFC landscape drawing!



江戸切絵図の図式で描いたSFC地図
この地図は、江戸切絵図の図式を参考に、SFCのキャンパスを再現しています。建物の配置、緑地の配置、そして道路の配置が、江戸切絵図の図式に基づいて描かれています。

左から、西本健人 眞下阿香里 吉田桃子 資料提供：石川 初

ろいろ面白いんですが、例えば鉄筋コンクリートの3階建てなんて江戸にはないので、無理に描こうとすると見立てる必要があるんです。例えば、廊下が路地になっていて、教室や研究室が全部町家のように描かれているんですよ。「廊下を路地にすると描けます」って言うから、「ああ、そうなんだ」って。そういうところに江戸時代の路地空間みたいなものが再現されていると考えられる、ということがわかってくる。彼女はこれを発展させて渋谷の切り絵図を描きました（右）。

紫牟田：これが、渋谷！？

石川：渋谷を切り絵図的に再解釈するとこうなる。切り絵図師になりきってしまった彼女に言わせると車道は江戸時代の堀割と解釈して描くと納得のいく図になると言うんですよ。だから、バス周りが船溜りみたいになっている。これが衝撃的な絵だったので、これを元にウィリアム・ケントが風景面を描き直した。Qフロントが障子みたいになってる（笑）。

倉澤：すごいですねえ。

紫牟田：都市の捉え直しですね。

石川：で、書割のようなSFCの風景は4色でいける、ってことに気がついて、4色でいけるからこれはポップアップカードになるよね、って話になって、ポップアップカードをやたら量産して、展示会で配ったりしたんですけどね。切り絵図も配りました。

うちの研究室に来ると全員強制的にGPSのログを取らされて、教員に定期的に提出しなければいけないんです。それが溜まってくるので、学生の動きによって生み出される地図ができるんです。これはものすごい個人情報で、彼女と別れるとルートが変わるとかということが起きるので、詳しくやるとやばい（笑）。だから匿名化してます。人によってキャンパスの使い方が違うんですよ。学生の属性によって、キャンパスの使い方も違うし、学生は施設間を移動するので動きがウェブ状になるんです。教員は拠点があるので、放射状になるみたいな。

倉澤：どのくらいの期間とったんですか？

石川：これは半年くらいですね。

紫牟田：すごく面白いですねえ。

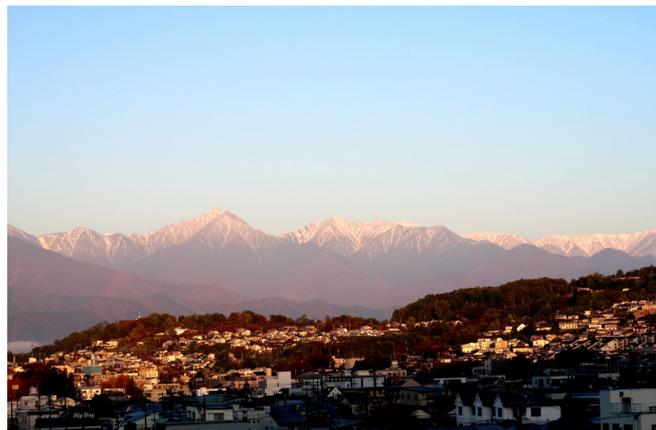
石川：一応、「都市における自然は何か」のスライドも用意しているので、また後ほどお見せしたいと思います。

紫牟田：ぜひお願いします。石川さん、ありがとうございました。

公共としての自然

紫牟田：それでは次に、倉澤さんをお願いいたします。

倉澤：倉澤と申します。超面白い石川さんの自己紹介の後に嫌だなと思うんですが（笑）、私は長野県の松本市から来ました。新宿から3時間くらい。これ（右）は今朝撮った写真です。寒い寒いという割に、思ったより白くなかったんですけど、冠雪が見えたのは今シーズン3回目かな。僕は午後2時前に松本を出たんですけど、その時にはもう一番大きい三角形の「常念岳」の雪は無くなっていました。



撮影：倉澤 聡



左：吉田桃子、右：西本健人
資料提供：石川初



資料提供：石川初

常念岳の左にちょっと槍の形がありますよね。あれが槍ヶ岳です。そこは3,180mと高いので雪が残っています。今日の松本は初霜がおりて、朝は1℃でした。紅葉が見頃の季節になってきました。これ（右）も今朝9時頃に仕事で市役所に行って撮ってきたんですが、6時とは違って雪が溶けています。これが松本城で、こう見ると緑豊かだと思えますけど、まちなかには全然東京より緑はないんです。たぶん木が嫌いなんですよ。また、後で話しますね。



私は、大学は経営システム工学科で、大学院で都市工学科の都市デザイン研究室にいて、フランスに行って「交通と持続可能な発展」という、聞いてもよくわからないようなマスターを卒業して、松本に帰りました。大学院の時、コンサルの仕事をして勉強してたんですけど、なかなかコンサルでも真つ当な仕事ができないなと思い、市役所でも面白くない仕事しかできないなと思って、これは自分で道を切り開くしかないなと6年ぐらいほとんどボランティアで呑み会代くらいは稼いでました。やっと4年前くらいから松本市の、職員ではなく民間として都市デザインアドバイザーになりまして、いまなんとか少しは飯のタネにもなってきました。

これ（右）はクラフトフェアまつもとというイベントです。松本はクラフトで有名なまちでして、いまもう忙しくて本体には関わっていないんですけど、関わっていました。「あがたの森」というところでやっています、2008年にはこういう（右中）交通状況だったんです。ここは駅から1.5kmくらいの場所で、駐車場も周りに100~200台くらいしかない。そこに2日間で5~6万人が来るとこういう状況になる。近隣のモールからも住人からも当然お叱りを受けていたようで、なんとかならないのかと相談を受けて、この通りの続きの通りなんです（右下）、これをこういうふうに変えるということが僕の役割だったんです。4年くらいかかりましたね。始めは「こういう時は車じゃないと行けるわけないだろ」とか「歩いて行くわけがない」とか揶揄されました。松本は東京みたいに交通の便がいいわけではないですから、歩いてもらうためにバスを安くしたり、面白い街中に企画を持ってきました。始めの2、3年は、モールの前で拡声器を持って「ここに車を止めるならここに来る資格はない！」とか一日中騒いでいましたね。



石川：怖い顔して言うんですか？（笑）

倉澤：怖い顔してましたね。でも、2~3年するとそれを見に来る人が出てきて（笑）。いまはもう問題がなくなったのでやっていませんが、「選挙に出るんですか？」とか言われてました。

石川：拍手とか起こりました？

倉澤：起きてましたね（笑）。

石川：すごい（笑）。DJポリスみたいだ。でも、みんな歩くようになりますか？

倉澤：そうですね、なんとか歩いていただけるようになりました。歩行者天国にすれば、当然滞留時間も長くなるので。

石川：松本の写真に見えないですよ。

倉澤：交通対策をやるために市が乗ってきて「工芸の五月」として取り組んで、交通渋滞はだいぶよくなりました。松本のまちなかには結構ギャラリーがいっぱいありますから、ギャラリーとのコラボや、美術館や博物館もこの時期に合わせて工芸関係の企画をやったり、クラフトビールの会社をつ

この頁すべて資料提供：倉澤 聡

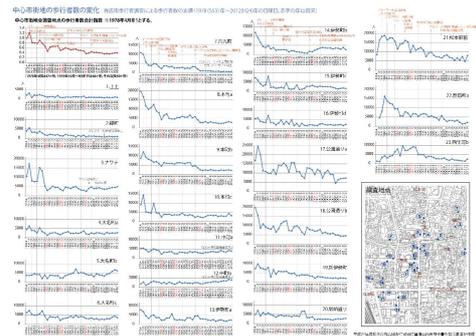
くった人たちが去年はオリジナルのビールをつくってくれたりしましたね(右)。松本全域40~50カ所でいろいろな企画展をやっているんですが、こういうことのコーディネーターとか調整をやっていたりしています。松本は湧水が豊富なので、L PACKというアーティストの企画ですが、7つの違う湧き水から採ってきた水で7つの水出しコーヒーの装置をタナキョン(田中恭子)というガラス作家がつくってくれて、見て楽しむ、空間楽を楽しむ、香りを楽しむ、味を楽しむ企画もあります。



あと、自分の仕事としてはこういう企画を運営したり問題解決をしたりするのは、いろんなデータも取られているのだけれど調理されていないものが多いので、それらをわかりやすく「見える化」をしています。これ(右中)は歩行者数の昭和54年からの変化です。

石川: このデータは市が持っているもの？

倉澤: これは市と商会議所が調査をしているのですが、誰もわかりやすく可視化していないんです。松本市は地方都市の中ではまだ死んでいないかもしれませんが、歩行者数だと30年で1/3とか1/4とかになっていて、死んでいる地方の悲惨さがわかります。



また、昔の地図と現在の地図を重ねてみたり、いろいろな地図をつくってまちをどう「見える化」するかということをやっています。

あとは、段々ゲリラ的になってくるんですが、これ(右下)は道路拡幅の事業用地なんですけど、木材協会の方たちにパレットをつくっていただき、地元の人たちとまちを語る飲み会とかしています。市役所の人メインになって企画していますが、社会実験的なことをやりつつ、なるべく新しい道で歩道が広がるように画策しているんです。



石川: これは中心市街地ですか？

倉澤: お城の中であり、松本城公園の目の前です。あまり都市デザインには予算が付かないので、その中で何ができるかですが、小公園の改修などでのプロセスを工夫しています。ワークショップもやりながら、意見を反映して少し水場を広げてあげたり、木を植えたりすることで、人のいないもったいない空間を人が過ごせる環境にしたりしています。左がビフォーです。

石川: 自転車置き場になっている空間をデザインしたらこんな感じになったってことですか？



この頁すべて資料提供: 倉澤 聡

倉澤: そうですね。ここは国道でバスも通っています。ものすごく良い環境になったわけではないかもしれませんが、ちょっとした工夫で人がいる場所になる。

石川：倉澤さんの設計ですか？

倉澤：設計は市役所の方です。当初は市役所の担当間でコンペをやりようとしていたんですけど、僕はそれでは面白くないから、初めから興味のある人たちを呼び込んで、それを活かして設計して、設計してるところも見てもらい、改善した後も見てもらうというプロセスはどうかと提案したんです。

石川：じゃあ、市民の人がプロデュースに参加してるんですね。

倉澤：そうですね。ここですごいのは地図ですね。奥にあった時は誰も見なかったのに、手前に配置しただけで、見る人が100倍以上になっているんです。

石川：すごいですね。

倉澤：ちなみに、一番お金がかかったのは分電盤です。分電盤がちょうど頭に当たる位置にあるので、ただでさえ狭いのに当たらないようにといろいろなものを置くわけですよ。そうすると狭くなって、余計に物置化してしまうんです。これに移したんですけど、植栽よりお金かかって……。こういう設計が始めからできればいいんですけど、なかなかできないですね。これも使われてないスペースを子どもが遊べる空間にしました。工事でも子どもたちが参加するワークショップをやりました。

石川：松本市は人口は？

倉澤：24万人くらいですね。

石川：減ってるんですか？増えてるんですか？

倉澤：いまは安定しています。

石川：横ばいですか。

倉澤：国勢調査だと、前回の2010～2015年で40人増えています。

石川：流入はあるんですか？

倉澤：結構若い人は東京に出て帰ってこないことが多いですね。

石川：でも、大学もあるし……。

倉澤：そうですね。滞留率は他の地方に比べればある程度いいのかもしれないです。あと、クラフトマンとか結構松本に移住してくださる方もいます。「ほろ酔い工芸」という企画で、器の作家と地元のおつまみとビールだったり地酒だったり毎年いろいろ変えるんですけど、そこに来てくれた東京の方が「松本に店を出すことを決めた！」と言って松本にクラフトビールのバーを出してくれたりとかがありますね。……というふうに、私はちょっとずつまちを変える仕事をしています。

紫牟田：結構、パブリックスペースと、自然をまちの中に入れていくというのを一緒にやっていく感じですが？

倉澤：そうですね。特にこれは市の事業名が「水と緑の空間整備事業」という名目なので、とりあえず緑を増やせという方向性がある……でも実は緑を減らしてるんですけど。緑が多すぎるんですよ。例えば、先の例でも生け垣の幅が1.8mくらいあるんです。邪魔なので減らすという……でも増えるように見えるんですよ。人の視点に心地よくデザインするというのは、あまり近代の大きな開発や外構のデザインではあまりやられていないのじゃないかという気がしますね。

石川：そうですね。どのスケールで見るとにもよりますがね。



資料提供：倉澤 聡

大きなスケールで捉える

倉澤：それで、時間軸と空間とで対数軸をとって1日から138億年の宇宙の起源というスケールで捉えてみたんですが……。

石川：これ、良いですね！素晴らしいと思う！

倉澤：コンクリートだって2億年とか2.5億年位前に堆積したのが山になっている、元は生物ですよ。そう考えるとかなり自然かもしれない。

紫牟田：自然の話が大きな話になっちゃうということは、この時間軸でみるとわかりますね。

倉澤：こういう時間はまちの中の石ころから見えるんですよ。石ころから自然との繋がりを把握することも可能です。



資料提供：倉澤 聡

石川：秩父に行った時にそう思いましたね。コンクリートつくっているのを見て、コンクリートって人工物のような気がしちゃうというか、誰かがつくってどこからか勝手に出てきたみたいな感じがしちゃうんだけど、実はあるものを削って再利用しているだけだから、そういう言い方するなら昔の生物の残骸のカルシウムですよ。それを思うと都市が珊瑚礁みたいに見えてくるんですよ。

紫牟田：珊瑚礁！（笑）

倉澤：見えてきますよねー。

石川：自然ってどういうスケールでいうかだよな、みたいな。

紫牟田：いやあ、そうか。スケール、スケールと言われていた意味がわかりました。私が浅はかでした。申し訳ありません。

石川：これ見ると「ビルも自然じゃん！」みたいな感じで思っちゃいますよね。

紫牟田：本当ですね。でも「ビルも自然じゃん！」っていま私たちが思えないのは何故なんですか？

石川：それはやっぱり身体のスケールに限界があるからだと思います。

紫牟田：そうか、自然のスケールに比べると身体のスケールのほうが圧倒的に短い。

石川：だから、植生の遷移で極相化みたいな射程距離で納得する一方で、でもなんかこの鉢の水仙は明日咲いてほしい！みたいな両方が必要なんです。

紫牟田：そうか、そうか。

倉澤：多分、その人の生き方の関係性で全く変わってくるんじゃないかと思います。

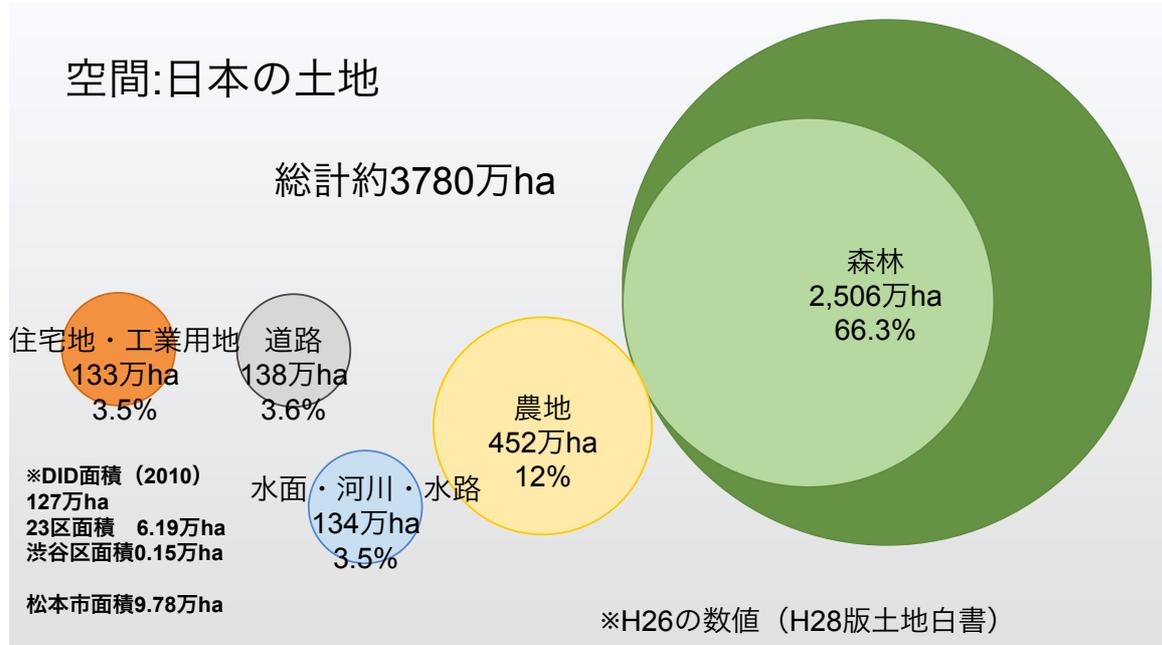
紫牟田：ここまで思い馳せると言うことですね。

石川：こういう図を描いて、自分がいまイメージしている自然とか議論になっている自然がどこに位置付けられるのかを自覚することはとても大事だと思います。話が噛み合わない場合はそれがずれているんですよ。「あなたが言う自然と私が言っている自然ってスケールがこのくらい違う。だから、こっちの話しようよ！」みたいにしないと話が噛み合わない。こういう視座は有用だと思います。

倉澤：先ほど学生さんが描いていたようにいろいろデザインしていけばもっと面白くなっていきますよね。そこに自然との良いアクセスのきっかけが出てくるんじゃないかと思って見ていました。

石川：こういうのを建築科の学生がちゃんと武器として持っているのと、講師の先生に「後ろに自然があるから、もっと参照したほうがいいんじゃないの？」って言われたら、「自然とおっしゃいますが、二次林ですよ？」と言いつける（笑）。そういう知恵もつくし。

倉澤：日本の土地利用では、森林が66%、農地が12%、住宅用地が3.5%、道路3.6%で、住宅地より道路のほうが多い。河川もそれなりにあって3.5%。ちなみに渋谷区の面積が0.15ha、松本はちょっと広くて9.78haですね。



資料提供：倉澤 聡

紫牟田：やっぱり圧倒的に森林が多いですね。

石川：これも時系列でみるとずいぶん違ってきますよ。要するに近年になって森林がぐわーっと増えているから。

倉澤：そうなんです、そうなんです。いま一番森の緑が多いところかもしれないですね。

石川：いま日本史上一番森が多い時代だって言われています。

紫牟田：本当!?

石川・倉澤：本当です！

紫牟田：何故？

石川：それは森に用事がなくなったからですね。

紫牟田：なるほど。伐採しなくなったから。

石川：戦前の写真とかを見ると、山はだいたいハゲ山なんですよ。有史以来、農地を拡大する歴史だったので。

倉澤：今日2枚目に見せた写真では、遠景は北アルプスで、中景の城山は昭和初期までハゲ山だったんです。蚕をつくったり共有林みたいなかたちで薪を採ったりしていたので本当にハゲ山だったんですね。

石川：農地や水田は江戸時代以降、拡大を続けていて、すでに江戸時代末期頃には農地を支えるための森林が枯渇してしまったという議論があるんです。結局、農地の拡大路線を止め、かつ化学肥料とガスのおかげで燃料と肥料の供給元であった森林に用事がなくなった。森林を使わなくなったので緑が復活してって、いまは最大限に緑が復活している時期です。

倉澤：江戸の薪炭材はどこで採っていたんでしょうか？

石川：江戸の薪炭材も里山というか入会地で採っていたんだと思います。

倉澤：かなり大規模でしょうね。100万の人口ですから。

石川：江戸初期は薪炭林の手前に茅場みたいなのがいっぱいあって、草地もけっこう肥料と建材の供給元だったらしいんですが、草地がどんどん水田化していったみたいなんですよ、江戸の末期になるに従って。草地がなくなるとかなり辛いことになる……ということらしいです。

倉澤：いまでも東京は人口を集めて増えてますけど、必ず減少局面にくる。そういう時にどうするかをいまから考えておく必要がある。そういう意味での自然をどうするかというところはすごく大事ですよ。そこで本当にもっと良くなるのか、荒廃してヤバイまちになっていくのか……。

石川：要するに手入れしていない森、放っておいておかれた森って付き合いづらいというか、必ずしも好ましくないじゃないですか。「自然」と言った時に何をイメージしているか、ですよ。

紫牟田：都市の自然を考えた時、全国的には大きな森林を背景として持っているのに、都市は「都市

化」によって自然との関わりが少ないというか、関わりを放棄しているような気がしているんですが。

倉澤：そうですね。基本的に江戸時代の頃から、昔も道は狭くて松が道から張り出していくとかいうことがおそらくあったと思うんですけど、基本的に自然が嫌いですよ。

石川：周りの自然が雄大で厳しいから、あまり手元に置こうという感じじゃないんじゃないかしらね。

倉澤：落ち葉を拾いたくないから木を切りましょう、ということになる。暮らしの中での葉っぱと木との関係性が、昔は使っていたけど使わなくなったことで宅地化して周りに迷惑かかる、という新しい関係性になっていて、用事をつくらない限り、なかなか自然を残すと言っても難しいんですよ。

紫牟田：生垣もどんどんなくなって行ってブロック塀になり、でも今度はブロック塀が危ないから金属になって……。

石川：金属になると味気ないからといって、今度はそこに造花が絡んで……。

紫牟田：竹みたいな……竹なんだけどプラスチックみたいな……。

石川：あー！タカショーの「エバーバンブー」でしょ！

紫牟田：む……「エバーバンブー」だと思います（笑）……そういうのが出てくる。一方で本物のバンブーはどんどんはびこって、ちょっと誰かなんとかしてくれ、みたいになる。結局、都市と自然の付き合い方がちょっと歪になっているような現状があるのではないかと思います。その歪さから脱して、もう少し新しい付き合い方ができたらいいなと思うんですけどね。たかだか100年くらいの都市化の問題かもしれませんけれど……。

造園、園芸、雑草

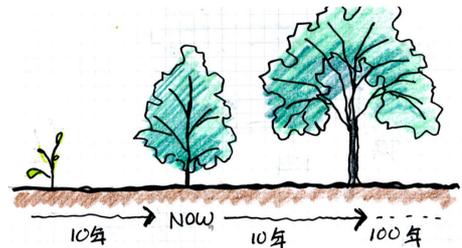
石川：そんな高尚な設問への回答にはなるとはとても思えないけど、これからお見せするスライドは建築の学生に植栽について手ほどきするための教材を少し改造したものです。建築学生は得てして模型に木を部品として置いて植えた気になっているので。だけど、木が生えているということはそれを支えているより広域な環境があるわけですよ。雨も降らなきゃいけない、陽もささなきゃいけない。土壌もなきゃいけない。それが成立するにはその外側にそれを支えている環境があるわけで、1本の木があるということは、そこに木が成立する環境があるということを示している。

それから、大きな木があるということはそれに費やされた時間があるということだよ。急に10mの木は出てこない。10mの木を見たらそこに20年の歴史を見ろ！みたいな、そういうことですよ。同じケヤキでも、ヒョロいケヤキと樹齢800年では扱いが違う。でかい木を植えるほうが費用が高い。どこかで費やされた20年にお金を払っているわけなんだよ、と言うための資料なんです。植物、特に樹木はいろんなものを売っていて、それぞれ示す時間の有り様が違うわけです。だいたい日本の庭園というのは伝統的に老樹を規範にしてたんですね、歳をとった木が美しいという。盆栽もそうですよね。ヒョロい木がいいよね、と言われ始めたのは本当に最近のことなんです。

紫牟田：それは建物の外構用に、ということですか。

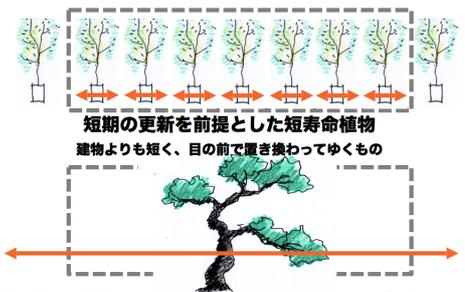
石川：それもあつし、国木田独歩さんとか、ああいう昔のオタク

植物の個体が示す「時間」



生長した樹木は、時間を具現している：
生長するために費やされた時間と、
それだけの時間が確保された環境の未来

施設の構想が想定した時間スケールと 植物に期待される時間スケール



老樹は施設の構想時間のスケールからあらかじめ逸脱している
既にあつたもの：未来にもあるもの

資料提供：石川 初

みたいな人が「雑木林いいよね」とか変態なことを言いはじめてこういうことになったわけ。で、これ元々は薪炭林ですよ。切って切って切り戻してるから、株立ちができるわけです。要するに、これは10年くらいのサイクルの風景なんです。盆栽は300年を模している。ターゲットにしている時間のスパンが違うわけですよ。いまは武蔵野雑木林というのだいたい北関東から横浜までのマンションとかは”武蔵野雑木林”と標榜していますが、こういうものは10年20年くらいを射程距離にしている。建築雑誌とか見ているとトレンドがあって、その時その時で建築が参照している自然が違うんですよ。ガラススクリーンの前に竹があった時代もあったし、中庭のデッキにヒメシヤラがあった時代もあったし、白くて細くてヒョロい鉢植えのなにかみたいなものとか、内部と外部を繋ぐシマトネリコの時代が最近までありました。いまもありますけどね。で、いま雑木の時代なんです。あとは、住宅特集とか見ると、扱いに困惑した既存屋敷の庭園の名残系の強剪定した砂地岩みたいなのが石燈籠と一緒に竣工写真に写らない角度に置いてあるみたいなことがよくあるんです。それもまあ、一種の自然ですよ。

紫牟田：これもトレンドなんですか？

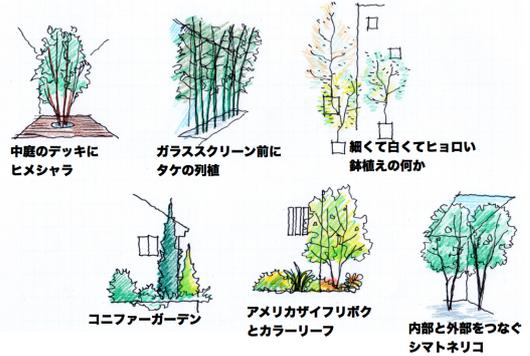
石川：トレンドですね。こうやって置かれている植物によってどういうものが期待されているかという、いまは施設より短命なものが置かれるんですよ。

日本庭園などがそうなんだけれど、樹木は施設や我々の寿命より遥かに長いものの象徴として扱われてきたわけなんです。そういう違いがあるんです。教材だからこういうこと言ってるんですけど、要はこういういろんなスケールで見ると。自然と言っても一言では言えないよというのがランドスケープの考え方だということを言うんです。倉澤さんのプレゼンでも「遷移」という言葉が出てきましたが、遷移は植物の群落の中身がどんどん移り変わっていくことなんですよ。だいたい日本の場合是一方向に向かって変化していくと言われていて、最初は草原から始まってだんだん藪が高くなっていつか、雑木林から鬱蒼とした木に変わるというふうになっていきます。

紫牟田：明治神宮は？

石川：明治神宮は人工的に狙ってつくられているから、必ずしもバッチリこれじゃないんですけど、

たとえば住宅に用いられる植栽のトレンド (2000-)



資料提供：石川 初

遷移と代償植生：人為と自然の関係



資料提供：石川 初

近いものになっていると言われています。例えば毎週刈っていると芝生として維持されるし、1年に1度くらい刈ると荒川の土手みたいな草原になっていくし、10年に1度切り戻していくと雑木林になる。それを放っておくとトトロが出始めて、最後このあたりで山犬が出てきて「黙れ、小僧！」と言われる(笑)。こちら辺から先は行ってはいけない系になるんです。明治神宮はこれを狙ってつくっているんです。

倉澤：明治神宮、すごいですよね。あれだけのものをつくるのは。先ほどの画面(右)に、オオアレチノギクとかセイタカアワダチソウとか、もともと無かったものが書いてありましたが、オヒシバとススキ、ネザサ……そのくらいですよ、もともとあったのは。

石川：ヒメジョオンとかセイタカアワダチソウとかは帰化植物なんです。

倉澤：「生態系被害防止外来種」と位置づけられてましてね。

石川：これを放っておくとススキとかに負けちゃうんですよ。やがてね。

倉澤：アレロパシー(ある植物が他の植物の生長を抑えるアレロケミカルという物質を放出したり、あるいは動物や微生物を防いだり、あるいは引き寄せたりする効果の総称)がありますよね。

石川：セイタカアワダチソウはアレロパシーがあるとされていますけど、あまり大群落になると自家中毒を起こして枯れるらしいんですよ。

日本は湿潤で温暖なので森になりやすいんです。森になる力が強いから放っておくと森になる。要は農民が日本を森にしないマネジメントをずっとしてきたんですけど、最近、森に用事がなくなって見放したので、いま緑がどんどん育って行って、全森林で「黙れ、小僧！」化が起きているんです。

紫牟田：そうなのね、もういるんだ！

石川：まだいないです(笑)。もうそろそろ出そうな感じ。毎週刈っていないところはならない。秋田の男鹿半島に野芝の原生地があると言われてはいるんですが、海岸べりのめっちゃや厳しい、他に植物が生えないようなところに生えているんです。つまり、芝刈りというのは、男鹿半島並みのストレスを植生に与えることで芝を維持している、ということなんです。でなければ、羊たちを放つという手もあるんですね。

紫牟田：確かに。とすると、東京の芝生には羊たちが必要……。

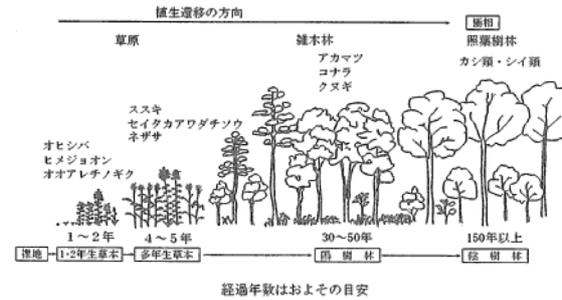
石川：あ、いいですね！ 皇居前広場とかに羊がいる……それはいいかもしれない。

環境省では「現況植生図」(下)というのが公表されていて、いま何がどこに生えているかを調査したもので、これを見ると、都市の周りにいまどういものが生えているかということがわかって、だいたいいま申し上げたようなグラデーションを描いているのがなんとなくわかります。

紫牟田：これを見ると都心のほうは割と短期だということがわかりますね。

群集としての植物の時間：遷移について

個々の植物は成長する、群集としては組成が変化してゆく



関東及び西日本の低地における植生遷移の方向
出典：『麗山の自然をまもる』(石井英・植田邦彦・重松敏則 著、緑地書館)

資料提供：石川 初

環境省 現況植生図 (自然環境保全基礎調査植生調査)



環境省 現況植生図 (自然環境保全基礎調査植生調査)



石川：都心は本当に短期で、特に中心地では植生図に記載されない

くらい緑が少ない。でも都心を拡大すると皇居、浜離宮、赤坂離宮、明治神宮、白金の自然教育園といった辺りは植生図に記載されるような樹分があるとみなされていて、要するにどの程度、人間が植生に対して関与しているかという度合いを示しているというふうに読むことができる。緑のあたりは20年クラス。薄い緑のところは1週間に1度刈っている。自然度というのは、そういう人間の関与の度合いを眺めることが可能なんです。面白いのは、現存植生図はあくまで自然の属性にしか興味がない。ここにネギが植わっていることには関心がなく、畑雑草群落（畑のような土地に生えそうな雑草が生えているエリア）に関心がある。これは見ているとすごく面白くて、こちらは水田雑草群落（水田的な環境に生えそうな雑草が生えているエリア）というんですね。頑なに”水田”って言わないんです。

倉澤：この植生図は関東しかないんですか？

石川：いや全国あります。これは羽田ですが、ここには空港のかたちをしたチガヤスキ群落があるんです。一言も羽田空港って書いてなくて、滑走路のかたちをしたチガヤスキ群落がある。しかも律儀にかたちをトレースしている。

紫牟田：こういうふうに見ていくと、全然違って見えますね。

石川：ある種の面白い見方ですよ。これは有名な図で批判もいろいろと多いんですけど。

それからこれは「潜在自然植生図」（下右）です。いまの環境でもし人間がいなくなったら究極的にどういふ植生が成立するかという図なんですよ。

紫牟田：面白い！

石川：面白いでしょ？ 誰も見たことないわけですから本当かどうかわからない。なのでこれを論拠



資料提供：石川 初

にするのは非常に批判が多いんです。宮脇昭先生という人が「どう考えてもこういう植生なんだからその植生が正しい！」って言って、その苗を植えると正しい自然が成立するという「全国の故郷森運動」という運動を実践されているんですよ。ランドスケープの人はそれが割と嫌いなんです。だって、ある自然が正しいと言われてしまうと他のものが間違っているという話になるからデザインと対立するじゃないですか。ただこの面白いところは、2つをこうやって置いてみると、いま見えている都市の自然が自然というよりも何かでかいダイナミズムの中の1つのプロセスの断面を見ているんだということに想いを馳せることができるということなんです。ただ森があるのではなく、この背後に80年かかって到達したプロセスがあるというふうに見えることができる。

身近なスケールで捉える

紫牟田：大きな話ですね。

石川：けど、大きいだけを考える必要はないんです。これを見て、我々がどういう虫眼鏡を手に入れることができるかという、電柱の下のタンポポを見たときに「森の始まり」と見る。抜くから森にならないんだけど300年くらい放っておけば明治神宮になりかねない。そういう兆候なんだって見ることができるんです。

倉澤：まずはズギナの種を蒔くとか、ツクシを食べるとかからも。

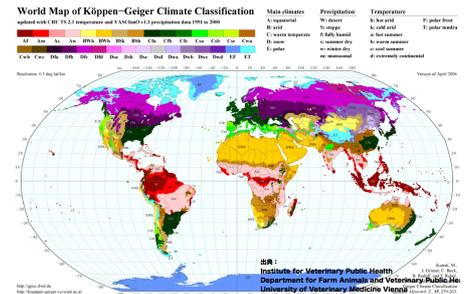
紫牟田：でも、土と種が出会わないと草にも森にもならない。森の始まりを無くしていつているのが「都市化」でしょ？

石川：じゃあ、もうちょっとやりますね！

これは、気候区分です。例えば、これは地中海性気候。この地中海沿岸以外で、一番大々的な地中海性気候というのはカリフォルニアです。カリフォルニアと地中海は自然としては親和性が高いということがこれを見るとわかる。植物というのは自分の原産地のイメージを引ずっているという仮説があります。いろいろ変わったエキゾチックな植物がありますよね。これ（右）は冬の寒い時期に赤い花が咲くので非常に目立つんだけど、ちょうどその時期は南アフリカの砂漠が雨季なんです。なので、これらは南アフリカ出身でまだ時差ボケ中でなので「雨季だ、いい季節だ。花咲かせよう！」ってやって来ないハチドリにアピールしているんです。そういうのはジャングルの下生えだったりするんです。例えば、ホンコンカボックは日本の環境に適応してしまったので、観葉植物として導入されるんだけど、外に出すと育つんです。東京の都市部ではヒートアイランドで気温が高くなったのででかくなる。でも足元を見ると鉢がある、みたいな。砂漠のイメージやヨーロッパのイメージとか、それを見ることで元の気候に想いを馳せざるを得ない。これがいまの都市の自然の面白いところですよ。



植物がもたらす「原産地のイメージ」



紫牟田：そうか。面白い。

石川：気候区彩色豊かな自然なんです。2002年ってずいぶん前で、最近もう一度同じコースを歩いたらほとんどが「地中海化」してたんです。いまものすごい勢いで、まちの植栽は「地中海化」しています。ローズマリーとかハーブとかオリーブとか……。

紫牟田：確かにオリーブは多い気がします。

石川：以前のほうが多様性が高かったですよ。オリーブばかりですよ。あとシマトネリコも多いですね。シマトネリコは簡単に実生するので生えてくるんですよ。あと10年くらいしたら、赤坂とかはシマトネリコの森になっているかもしれない危険性がありますね。フィールドワークをしたのが12月だったので気がついたんですけど、日本の場合、季節限定で針葉樹林がある。こういうふうに出てくるのもある種の自然だよと思います。

最近、学生には、まちの植物というのは「造園」「園芸」「雑草」の3種類に分けられるとみると

この頁すべて資料提供：石川 初

わかりやすいよと教えるんです。「制度として植えられた植物」「個人が楽しみのために植えた栽培植物」「生えてきたもの」、だいたいその3種類で構成できるんです。これは「造園」空間なんだけどこの街路樹のケヤキが勝手に生えてきているので分類としては「雑草」なんです。「造園」が「雑草」化する、というようなことを見ることができます。これは「造園」

なんだけど足元から「雑草」生えてきましたよね（右下2点）。
こうして見ていくと、面白いのは、下町の「園芸」空間の植物はいま半分以上が熱帯植物なんです。 「造園」は東京が涼しかった時に制度化されているからまだ追いつかないんです。「園芸」のほうがかん先に先をいっているんですよね。個人は枯れたら新しいのをちゃんと買って来るから。「園芸」のほうがいまの自然にきちんとアダプトしているんです。だから「園芸」をみるとその地域の自然がわかるということが起こるんです。

あと、もう1つは帰化植物ですよね。さつき倉澤さんのお話でありましたが、いま都市で生えているものに在来種はほとんどないんです。というのも、都市の気候は変化がすごく激しいので、日本の良い気候でゆっくり育つ歴史を背負ってきた在来種がついてこれないんですよね。アメリカのミシシッピの洪水源とかでガーって洪水があつて、そのあと半年くらい乾いているみたいな時に、短期決戦型でバーって咲く、みたいなところで鍛えた奴らが都市に来てその才能を発揮して都市で増えている、というのが都市の雑草の特徴なんです。だから山野草図鑑とかを買っても都市の雑草はわからないです。帰化植物図鑑を買うとわかる。この『日本帰化植物写真図鑑』（全農協）がすごい面白いんです。買うと葉書がついていて、葉書に住所を書いて申し込むと「帰化植物友の会」というのに入れる。「帰化植物友の会」に入ると、半年に1回『帰化植物通信』というのを送ってくれるんです。それが面白いんですよ！新しい帰化植物が報告されると写真ニュースになってくる。成田とかすごい多いです。海外からの物資に付いて来ちゃうんです。ボトルネックと言って、生えても2年ぐらいすると消えちゃうのもあるんだけどそこを生き残ると帰化植物化する。そういうのが報告されるんです。いま俺的にホットなのは、ネコジャラシ（エノコログサ）。あれがアメリカに行って、アメリカの気候があつたみたいでアメリカのトウモロコシ畑で巨大化して2mくらいのネコジャラシになっているんです。その種が飼料作物に入って帰ってきて、すごいなんか態度でかくなった帰国子女みたいな感じで巨大化したネコジャラシが増えるんじゃないかっていう……それが注目中ですね。巨大ネコジャラシ！

倉澤：ネコジャラシは東京でも見られてみなさんご存知だと思いますけど、結構種類があるのご存知ですか？よく見ると金色だったり紫だったり、ぜひそういう細かなところを見ていくと違いがあつて面白いと思います！

関係をつくる

紫牟田：最初は「自然とどう付き合えばいいか」みたいな話をしようと思つていたんですが、だんだん「自然も見方がわかれば面白くなる」みたいな感じになってきた。そういうことなのでしょうかね？

石川：都市の自然が失われているから回復しなきゃいけないというのは大きなテーゼとしてはあるんですよ。「造園」というのはそのミッションによって生まれた職能なので、基本的に都市には緑を増やさなくてはいけないというふうに思っているわけですよね。だけど都市に緑を増やさなければいけないというのはものすごいざっくりとしたストーリーで、実は我々が普段接しているところは、都市に緑を増やさなきゃいけないかどうか以前に「これ、育たないんだけどどうすればいい？」みたいな、そういうところのスケールだったりするじゃないですか。実際に触れる緑って、都市に緑を増やさなくてはいけないというよりもこういうスケールの緑のほうが多いわけですよ。そういうところの解像度を上げると自然ってすごく豊かですよ、どこにしようと。都市の場合は、鉢を育てていて



資料提供：石川 初

「ここはちょっと、陽当たりが悪いから朝顔育たないわ」と言って鉢をちょっと変えてるみたいな、そういう人たちの営みを含めて全部自然で、そこに長く住んでいる人たちが少しの水やりの違いや、鉢の置き方の違いを積み重ねながらチューニングしていった痕跡が風景になって現れてきているんです。それもなんかある種の自然だと俺は思うんです。

紫牟田：でも本当に自然とお付き合いするのは難しかったりしませんか。庭がどんどん減っているのも、手入れが難しいとか時間がないとか。そうして、簡単に鉢植えとかプランターとかになり、関係性の結び方がだんだんミニマムになっていく気がするんですよ。「造園」というものは自分ではない誰かがやっているものでしょ？ でも、自らのランドスケープとしてなんらかの理想形を求めるなら草むしりをしなければならぬし、草むしりをしたところでデザインをキープするということは自然相手だととても難しいではないでしょうか。

石川：それはありますね。そこを巧みにやるって重要ですよ。

紫牟田：巧みにやる？

石川：巧みに手入れをしやすいとか、うっかり手入れをしてしまうとかね。

紫牟田：なるほど、「うっかり手入れしてしまう」。

石川：例えば、先ほどの松本のポケットパークなどは、「何月にここを刈ってください」みたいなマニュアルでできるじゃないですか。複雑な植栽にすると技術が必要になる。そういうのに抵抗はないですか？

倉澤：行政はコロコロ人事が変わるので、担当者が変わるとできなくなることもあると思うんですけど、これまで「造園」というレベルでは、街路樹とかを増やしましょう！と言ってかなり増やしてきたんですけど、強剪定して目標樹形を考えていないし、植えたものがどういう状況なのかという観察をあまりやっていないんです。だから、まずは観察をしようっていうことを広めていくのも大事なのかなと思っています。そうでないと「この雑草は増えすぎてやばいな」とかわからないし、良さそうなのが悪そうなのかもわからない。本を読んで覚えるというよりも、やっぱり2、3年付き合いながら観察していると、「こいつはいけないようにみえて可愛いくてよいね」とか「これは綺麗に見えるだけだよばいね」とかわかるようになるんですよ。それと、管理が必要なものをどう管理していくか、どう目指すところにするのか、200年後なのか700年後なのか、1mくらいにしたいのか芝生にしたいのか、そう考えて定められるみたいなことにしたいですよ。

左京：倉澤さんのFacebookを拝見しているといつも川の草むしりをしてますよね（笑）。

倉澤：じゃあ、「造園」「園芸」で「雑草」をちょっと。専門家ではなく、草を抜いている変な人として話します（笑）。

石川：それ重要ですよ（笑）。草は抜かないとね。

倉澤：渋谷とか東京の自然とは離れてしまっていますが、これは池上さんという方のお宅です。松本とかの人も自然が嫌いになってきているから、こういうのは一般的には迷惑施設に他ならないですよ。これは城下町のすぐ外れにあって、いまでは中心部なんですけど、270年ぐらいの家の広い庭では毎日草抜きです。これだけのものを持つということは、それなりの抜く覚悟があるかや、人を雇って抜くとかコストをかけられるかとかそういうレベルですよ。

で、話はちょっと変わりますが、日頃まちを歩いているとたまにこういうモンスタータンポポに出くわすんです。（右上）

石川：すげー！！

倉澤：次に、これ（右下）もタンポポですけど、何が違いますか？

石川：萼（ガク）の向きですね。



資料提供：倉澤 聡

倉澤：はい、向きが違います。玉っぽいですよ。これはたぶん、名前はわからないですけど、関東タンポポか信濃タンポポ。要するに在来なんですね。

石川：さっきのは西洋タンポポですよ。

倉澤：何が違うかという、成長のスピードが全く違うんですよ。種のできるまでのスピードが圧倒的に西洋タンポポのほうが早いんです。

石川：すごく高くなって綿毛になりますからね。

倉澤：明治神宮とかの奥深いところにはこういうのが残っていると思うんですね。これも池上さんというお宅は塀があるから残るんです。

石川：なるほど、なるほど。

倉澤：西洋タンポポは入ってきているんですけど、池上さんが結構抜いているし、私もたまに抜いたりしているんです。

石川：西洋タンポポだけを抜いているんですか？「選択的除草」ってやつですね。

倉澤：そうしないとすぐに駆逐されてしまうんです。逆に、こういうものを蒔いて学生さんに配ってどうなるか記録したりしたら面白いですね。まちの人でもいいですね。いまはほとんど見ない、昔は当たり前にあった植物を育てるとか。

あと、これ（右上）を見て草の名前わかる人いますか？

石川：えーと、ムギクサ？

倉澤：はい。これがイヌムギで、ちょっと長いのがオニウシノケグサ。右2つはわかりますか？

石川：カラマグロスティスみたいな穂ですね。

倉澤：これ、クサヨシです。右から1つ目と2つ目が同じなんですよ。初めは違う草だと思ったんですけど、よく見ていくとだんだん熟して穂が閉じてくるんです。写真のイネ科はクサヨシ以外はすべて外来種で、ムギクサなんかは結構困ったやつになったりしますね。

石川：クサヨシとファラリスかな。

倉澤：このレベルになると抜けないんですけど、本当は選択的にやりたいんですよ。

で、これ（右中）は女鳥羽川という川ですが、僕はこういうところで草を抜いているわけです。

石川：抜きがいがありますね！

倉澤：これはオオブタクサです（右下）。5mになるとさすがに抜けなくて、3mまでなら思い切り力を込めると抜ける。これはどんどん増えます。その手前にある穂がクサヨシですね。春の草なので5月くらいに種ができます。

あと困ったものとしては、これは水性植物なのであまり馴染みがないかもしれませんが、左がカワヂシャという植物で、右がオオカワヂシャです。いま環境省の特定外来生物になっています。ものすごく増える。カワヂシャの花は小さくて白い花なんです。

石川：松本で、増えているんですか？

倉澤：はい。3年前に小さいものを見つけたんですが、次の年気づいたら、もう全面に広がってました。

石川：うおー、すごいね。

倉澤：それだけ増えてカワヂシャと交配してしまうから、西洋タンポポと同じ運命を辿ってしまうんじゃないかと……。こういうのを見つけてしまったためにどうしようかということで、一応抜いているんですね。年間70時間は草刈りや草抜きしています。

紫牟田：一人で？

倉澤：一人で。人を増やす戦術をいま立てているところです。

石川：（笑）。素晴らしいね。倉澤さんにGPS持たせたいなあ！



資料提供：倉澤 聡

倉澤：ここも、10月に中学校の先生が草刈りをやるんですけど、種が出来る前にやらないんですよ。種が出来てから草刈りをすると種を蒔くことになってしまいますからね。

石川：ここは冠水するんですか？

倉澤：します。でも、5年に1度くらい。ここも女鳥羽川のワークショップをやったこともあり、しょうがないから切るかということで、1人でこれだけ……。

石川：え！これ、1人ワーク？

倉澤：1人ワークです。3mくらいの草になると、100坪で1時間かかりますね。1,000坪あるので、ここは10時間くらい。



左が草抜き前、右が後 資料提供：倉澤 聡

石川：シーシュポスの拷問みたい！向こうまで刈った時にはこっち側はもう生えているみたいな。永遠に生え続けるみたいな。

紫牟田：自然との戦いみたいな。

石川：ここまで戦わないですよ、普通！これは相当なヒーローですよ（笑）。

倉澤：ヒーローとは言われなくても、変わっているって言われます（笑）。

倉澤：町会とか学校の先生方とかは、種が出来てから草を刈るんです。子どもと川との関係性について言うと、いま鎌は自宅にないし刃物を持たせると危ないということで先生たちが刈るんです。子どもたちは刈った草をゴミ袋に詰めるだけなんです。

紫牟田：そんな馬鹿な！

倉澤：子どもたちも面白くないですよ。僕の頃はちゃんと草刈りやってたんですけどねえ。この写真は中学生ですが、小学生なんかは「川に行つて遊んじゃいけない」という決まりがあるみたいですね。

石川：中学生がエンジンのブッシュカッターとかを使うのかっこいいよね。

紫牟田：それこそヒーロー感がありますよね！

石川：ありますね！

倉澤：選択してハギを残しておいたんですけど、刈られちゃいました。秋の穂がなびく姿を見たかったんですけどねえ。3本くらい残ってたのでそれを楽しみました（笑）。

でも、こうやって草を刈るとすぐに親子とかが降りてきてくれるんですよ。やっぱり、こういう関係性を自らなんとかつくることでだんだん周りの方が興味を持つてくれる。

石川：これは、お住まいの近くなんですか？

倉澤：近くです。だから、やらざるを得なくなったんです。気づいたら深みにはまってしまったということですね（笑）。

石川：どういうコスチュームで刈ってるんですか？

倉澤：普段は作業着を着ますね。あと水の中に入るので胴長を着て汗だくになりながら膝下ぐらひは水に浸かって……。



資料提供：倉澤 聡



資料提供：倉澤 聡

石川：すごい、本格的！ 実践してから何年ですか？

倉澤：もう10年以上ですね。フランスから帰ってきてからすぐ始めたので。この場所は今年初めてですけどね。

石川：一緒にやる人はいないんですか？

倉澤：町会の部分は弟とかが出てきたり……（笑）。

石川：弟！（笑）

倉澤：その範囲以外は僕しかやらないですね。町会がやらないところをなんとかやったり。何でこういうところまでやるのかというと、嫌な草が増えればどっちみち雨が降ると種が流れてきてまた生えてくるんですよね。草刈りをなんとか5キロくらい上流に伸ばしたいと考えています。

石川：でも一緒にやる人いそうですけどね！ ネットで呼びかけるとかどうですか。

倉澤：これからです。

石川：「除草.com」とかドメインとるとか（笑）。

倉澤：いいですね（笑）。

紫牟田：「選択的除草.com」とか、ハッシュタグで「#選択的除草」。

どういう使い方をするか

倉澤：で、刈ってあると、イタリアの留学生たちがここでテスト勉強しているとか（右）。

石川：イタリア人すごいな！ 場所の使い方が上手ですね。いきなり風景になってますよね！

倉澤：左上の木はアキニレという木なんですけど、30年前に小さな盆栽が置いてあったら、あんなに大きくなってしまいました。

紫牟田：倉澤さんが置いたの？

倉澤：私じゃないです。

石川：すごいなあ！ もうこうなったら、切れないですよ！

倉澤：今年の春に護岸改修してどうなったかを見せると、こうなったんです。

石川：残ってるんだ。

倉澤：切られると思ったんですけど、切られなかったですね。

石川：河川改修しなきゃいけない事情はわからないでもないけど、もったいないな。

倉澤：それですね、ゲリラ的にベンチを置くわけです。（下）

会場：（爆笑）

倉澤：河川管理者が見たら「本当は、ダメだよ」ってたぶん言うんですけど、とりあえずすぐに片付けられるし置いてみたんです。

石川：素晴らしい！これだよ！イタリア人がいなければベンチを置け！みたいな。

倉澤：勝手に置いてみました、みたいな。そうするとこういうふうになるわけです。

紫牟田：ああ、いい風景になった。

石川：この木、いいですね！

倉澤：先日の大雨でもベンチの位置まで水は来なかった。で、2つじゃ足りないと思って4つ置いた。そうすると、何が違うかということ、座ってもいいというメッセージを与えるんですね。



資料提供：倉澤 聡



資料提供：倉澤 聡

石川：積極的！ ああ、いいですね！

倉澤：結構くるんです。この写真は東京在住のフランス人と台湾人のカップルなんですけど。

石川：ここに座るのは留学生が多いという傾向があるんですか？

倉澤：いや、結構日本人のカップルも座っていますよ。カップルには話しかけにくいんですけどね。

石川：いや、素晴らしいね！ やっぱ、こういう河川改修するときの護岸の特徴って標準断面でつくるから、川がずーっと同じ仕様になるんですよ。だけど、本来の川ってどこを流れるかによって全く幅も流れ方も生えているものも違うはずなのに、それが全部一緒になっちゃうんですよ。土木って基本的に現場に判断させない技術体系なので、下手なやつがつくっても上手いやつがつくってもいかに同じ品質が出来るかということも100年追求した結果、現場で判断しないで標準で全部やるので、こうなっちゃう。議論の余地があるにせよ、まあ、これが我々の生活を支えているわけだから。それにどううまく乗っかって、ベンチを置的な使い方をするかだと思いうんですよ。

倉澤：やっぱ、関係性をつくらないと。”近づく”という行為すらないので。結構、ベンチを置くだけでも全然違うんですよ。公園のベンチよりよっぽど座ってますね。

石川：それ、めっちゃ皮肉ですよ（笑）。だけど、ベンチは座るためにデザインされているから、特に背もたれのあるベンチは置いてあるとそこに座っている人も想像しちゃうから人の気配を感じますよね。

紫牟田：誰かが立った後かもしれないというふうに思うところが姿のいいところですよ。

倉澤：あとは雑草というか、アズミノヘラオモダカ（右上）という今年見つけた草なんですけど、聞いたら女鳥羽川で見つけるのは初めてで、安曇野と小谷村、岐阜の一部と木曾でしか見つからない、非常に貴重な草だったんです。こういうことも日頃から見ていると、極稀ですが発見することもあります。もしかしたら土が削られて種が出てきたのかもしれませんが。右下はサジオモダカという、これも貴重な長野県の絶滅危惧種で、20株くらい見つけたものです。この間の雨でだいぶ流されてしまいました。

石川：一瞬、フキノトウにも見えますね。

倉澤：あと例えば、これはクマツヅラ（右下）という雑草なんですけど、こういうものは増えても支障のない雑草なんですよ。漢方でも馬鞭草という名前だと思いますが、そういうような草をバンバンとゲリラ的に蒔いて、ちょっとみんなで煎じて飲んでみよう、っていう遊びも面白いかなと思うんですよ。古来から普通に生えている雑草たちなので。

石川：こういう雑草は放っておくとなくなっていくこともあるので、適度に緩く管理されているとそういう在来種が復活したりすることもあるんですよ。昔からの付き合い方の作法みたいなものがあるので、そういうのにキチッと自然は反応するから。

倉澤：あとこれはナガミヒナゲシ（右）と言うんですが、これは最強なんですよ。1cmでも花を咲かせて増えていくという……。

石川：これは、あまりにも最強なので、俺、好きなんです。元々石灰岩質の、地中海沿岸の乾いた岩場に生えていた連中なので、アスファルトの横でコンクリートで熱くて乾いているというのは故郷そのままなんです。我々は、車が通りやすいように地中海の海岸の気候をつくっているんですよ。そうすると「ナガミヒナゲシさん、どうぞ～」と言って……。

倉澤：まさにそうですね。

石川：役所の予算がついて、造園会社に中央分離帯のツツジとかの刈り込



この頁すべて資料提供：倉澤 聡

みを発注するのが5月で、丁度この花が終わった頃なんですよ。花が終わってこいつらが「これから種を蒔くぞー」と用意をしたところで業者が来て刈ってくれるから、それでふわって種が撒き散らされるんです。なので、4月に始まる公共工事のサイクルがこのヒナゲシさんたちを支えてるって言われます。

倉澤：この写真では誰が増やしているかという小学生なんですよ。小さい粒があるので、子どもが遊ぶには絶好なんですよ。タンポポもふーって吹くから広まっていったのも結構多くて、これも見た感じは綺麗だし、種もこの中に1,000個はあるんです。

石川：眠ってられるんですよ。わりと平気で土の中でチャンスを待てるので、土に混じってシートバンク状態になっていて、状況が許すとぽつと生えてこられる。でも、ただ雑木林の中には入ってこれないんです。日当たりがよくて乾燥していないと生えないから。元々の日本の農村の周りの環境みたいなもので、がちりタイトな生態系があるところではこういうのは入ってこれないので、これはある種の指標になるんですよ。これが生えてるといことは油断も隙もある環境だということわかる。

倉澤：これは特定外来種とかそういうものには指定されていないので、増やしたかったら種を持ってきてその辺に蒔けば相当増えますよ。あとは減らせません（笑）。いま格闘中なんですけど、抜いても抜いても負けますね。4年前には全然なかったんですけど、いまは市街地中こればかりです。

石川：これすごいです。西日本から始まって、西日本の春の風景を変えちゃったんですよ。それが関東や東北へと道路沿いに導火線みたいに、関越地中海性気候ってやつが日本中のびているんです。

倉澤：あんまり増やさないほうがいいんですけど、おそらく綺麗なのでみんな蒔いている。潰すと粉みたいにおはつと種がでてきて面白いので、みんなそれで遊ぶんです。

石川：開智小学校の横にポピーが、いろいろと示唆的ですよねえ。

造園の園芸化、雑草の園芸化

紫牟田：えー、そんな話をしているうちに時間があと15分くらいしかなくなってしまったんですけど、だんだんわかってきたのは、造園的なマネジメントをしようというよりも、雑草や園芸とどううまく付き合うのかというほうが面白いのかなと思って聞いていました。

石川：個人的には、園芸的な手法というものに今後の可能性を感じてます。造園的なマネジメントはやめられないです。これは都市である限り、制度としてマネジメントしなくてはいけないし、マネジメントしなくてはいけないものをいっぱい建設してしまったから、落とし前はつけ続けなければいけない。だけど一方で、公園を市民に管理するようにしたりとか、市民参加にしたりという動きというのはある意味「造園の園芸化」だと思うんですよ。「自分ごと」にしていくというのはそういうことだと思います。「園芸化」していくことで、園芸者がその場を自分の庭だと思いはじめることが、これから重要になってくるだろうなと思います。

倉澤：逆もそうですね。「雑草の園芸化」というのも可能。

石川：先ほどのハギを残しているのは「雑草の園芸化」ですよ。自然を自分の庭として見なすことによって、そこを手入れし始めるというのはありますよね。「雑草の園芸化」とは考えてなかったけど面白いですね。「造園の園芸化」と「雑草の園芸化」がもしかすると都市の緑の付き合い方として面白いですよ。

紫牟田：それでは、そろそろ会場にいらっしゃる方にも参加していただきたいと思います。質問のある方どうぞ。

質問者A：造園や園芸の専門ではなくアートをやっています。倉澤さんがすごい力を入れて川の戦っているあとを見るとすごいパッションなんですけど、あれはみんなが楽しめるようなパブリックスペースをつくりたいというモチベーションなのか、どういうモチベーションなんですか？また、コンクリートも自然物だという長いスパンでみたら在来種も外来種も自然は自然であると思うのですが、どのスパンで在来種というのかと疑問を持ちました。ある意味エゴイスティックなことだと感じたんですが、どうお考えですか？

倉澤：増えて欲しくないなというのはかなりエゴイスティックですけど、増えて欲しくなくても本当に増えちゃうんで、そのレベルで判断しています。はっきり言ってコントロールできないです。パッションに関しては、パブリックスペースもプライベートスペースももっと楽しくつくりたいし、もっと関わりたいと思うんですよね。命あって1年で死んでいく草もあれば多年草もあつたり、自然は常にいろんなバランスを変えながら生きている。それを見ていると結構面白いんですよ。人は裏切るけど草は裏切らないし、季節に応じていろんな姿を見せてくれる。個人的にそれが面白いなと思っています。あとは好奇心や意地もあるかな。

石川：草抜きってなんか止められなくなりますよね。

倉澤：気づいちゃうんですよ。初めはわからないんですけど、慣れるともう30m離れても見えちゃう。見ると、そこから1000個の種ができる、10万個の種ができるという感覚が体に染み付いちゃうんで、自分の手の届く範囲は抜いちゃうわけです。

石川：植物を敵視するというのが妥当なのかというのは常に我々に突きつけられている問いです。すごくデリケートな問題もあって難しいところがあるんです。

往々にして、生態系保全の議論って郷土主義になるんです。だから、それに関してどういう物言いをしているのかはとても注意深くならなくてはいけないと思います。その一方で、ちょっと植物を勉強するとわかると思うんですけど、絶滅危惧種というのはなくなったら本当になくなっちゃうんです。ものすごい年月かけて育ってきてもう2度と現れないかもしれない種なんですよ。たまたま長い間維持されていた環境があったから存続していったのに、ほんの十数年の人のエゴで、例えば、「水が来ないようにコンクリートを立てよう」みたいな感じでやったためになくなっていいのかわ。それが切実な問いとして突きつけられるんです。本当にバランスの問題はあるし、その場その場の現場の判断がすごい重要だし、そこで自分が何を感じて何を取り合えず選択していくかということなんですね。それを一般解として掲げて人に押し付けた途端に、郷土主義や都市エゴみたいになっていくんだと思うんです。

倉澤：そこは本当にセンシティブなところで、僕の立場では放っておけば必ず増えるし、僕が抜いても必ず増えるようなものは抜いています。1,000年単位で考えたら、そういうものがあって新たな生態系が築かれていくのだから、長い目で見れば僕の草抜きなど無意味かもしれませぬ。だけど、見ていろいろ楽しむなかで、抜く草、守る草というところでは選択的に、ある意味エゴイスティックにやっているところもありますね。

質問者A：「園芸化」というキーワードで。

倉澤：そうですね。

石川：「選択的除草」というと、逆張りコントロールな気がしてしまうけれど「園芸化」っていいですよ。 「雑草で園芸化」というのは今日は良い言い方に達したなと思います。

質問者A：ありがとうございます。

質問者B：都市では「造園」が頑張っていて、造園で働いていると「スタジイを植えろ」とか「武蔵野はクスノキ、ケヤキとか森の木を植えろ」とかよく聞きます。職場が新宿なのですが、新宿では武蔵野の森が目指されて木が植えられ、結果2~30年経って強剪定だけされた木だけ残っているんです。一部、綺麗にケヤキが残されているところもありますが、ビル管理会社が園芸化を頑張っちゃったようなところがあります。今後、「造園」が頑張るところのヒントというか、良い視座が見えないかと思ってるんですが、いかがでしょうか？

石川：先ほどの時間のスパンを見直す必要があると思うんです。つまり、ケヤキは雑木林の1種類であつてもいいのに、まるで御神木みたいに大事にしてしまったから、いきなりここを目指して「これが正しい」というのが「造園」のスタンスだったけれど、「これでいいじゃん」という「造園」もこれからないといけない。桜はそもそも50年くらいで植え替えるものだというもの込みで設計をすれば、古い桜と新しい桜を交互に植えていって、どうしようもなくなる前に新しい桜に更新するみたいなことはできるんです。そういうスパンのマネジメント込みのデザインをしないといけないんです。これまでは「これを目指すんだ」って植えたら一応完成のつもりだったんですが、ちょっといまはしわ寄せがきていると思うんです。新宿でも、京王プラザの前だけは良い感じに雑木林がある

じゃないですか。それって、深谷光軌（ふかや こうき／1926年 - 1997年／造園家・作庭家）が20年経ったら木をもう一度生やせみたいな雑木林管理を指示したんですね。いまでも厳密に管理されているかはわかりませんが、深谷さんは植えたら植えたままで良いものはできると思ってなくて、定期的に人が管理することによって雑木林的な空間が維持されると思ってたわけなんです。これからは「造園」もそこをつくり続けるという覚悟をして設計をすればいいじゃないかと思います。

質問者B：気がついたら、「造園」も土木化してしまったみたいなの……。

石川：そういう意味でいうと、「造園」って土木だったんですよ。土木のほうがお金もあるからね。土木の一部だった「造園」が独立した「造園」になったほうがいいよね。

倉澤：渋谷区とか都庁には造園職は結構いるんですか？

石川：いますよ。

倉澤：松本のような地方では、都市デザイン担当というのはできたけれど造園職は採っていないんです。土木・建築の人たちが担当しているから植物について専門的に詳しい人が少ないですね。

石川：それに「造園」と「園芸」の交流って長い間そんなになかったですよ。だから、混ざったほうが良いですよ。

紫牟田：「造園」の時には住民が関われない感じがなんとなくありましたもんね。住んでいるのにマンションの入り口に関われないとか。

石川：あとはうっかり関わっちゃう木を植えれば良いですよ。

紫牟田：「うっかり関わる」？

石川：例えば街路樹を柿の木にするとか、植え込み全部イチジクにするとか。そうするとうっかり関わるみたいなの……。

倉澤：それはいいですね。今日お話ししようと思ってたんですけど、柿の木って実が出来てもなかなか採らないんですが、干し柿って風景になるんですよ。しかも美味しいんですよ。剥いたり揉んだり手間がかかりますけどね。

石川：これが顕現している季節感！素晴らしいよね。

倉澤：去年いっぱい採れたので仕方なく剥いたんですけど、すごい綺麗なんですよ。干し始めの1日目2日目とか。だんだん色が地味になってくるんですが、渋谷にこういう柿を1万個とか……ニューヨークの10億個の牡蠣のオイスタープロジェクトに倣って、10億個の柿プロジェクトとか。そんなにできるかわからないけども（笑）。

石川：渋谷柿！渋谷柿だけど、甘いみたいな。

紫牟田：いいですね。関与できる木がどんどん少なくなってきたなという印象はありますね。柿の木もビワの木も。

倉澤：ビワも渋谷あたりだと気候がいいのでいけますね。

石川：果樹は木の下が汚くなってしまふので、嫌われるんですよ。

紫牟田：造園では嫌われていく？

石川：うーん……そうですね。「造園」の肩を持つとしたら、本当に「造園」がやりたい放題やれるなら、木の下全部土になるからゴミにならないんです。要するに落ちた葉っぱとか木の実がゴミになるのは、下がアスファルトで舗装されているからなんです。下が石畳だったら風情になるし、土だったらそのまま肥料になる。そのくらいまで、「造園」が計画できれば、そういう軋轢は起きなかったんですよ。土木のひとつの道具として「造園」が用いられていることが「造園」の限界を露呈させたと言えるかもしれないです。

質問者C：お話ありがとうございます。私は将来的には地域のブランディングとかコミュニティデザインとかをやりたいと思っています。季節を生かしたものや何か1つ祭り事をうまくコンセプトをつ



資料提供：倉澤 聡

くって開催することで、中の人や外の人を巻き込んで地域を盛り上げようみたいなかたちがあると思うんですけど、その季節の時期には盛り上がるけど、それ以外の時は殺風景になってしまうたりうまく周りの人を巻き込めないとか、「自分ごと」に感じられない瞬間が続いてしまうじゃないかという懸念点があります。ピンポイントで盛り上がる瞬間ではなく、日々の生活の中で「自分ごと」として捉えられるまちづくりは何が要素になってそのように形成されていくのか。そういう視点があれば教えていただきたいです。例えば、私は新潟出身ですが、「長岡花火」の時だけすごい人が来て、長岡の人もすごい誇りを持ったりしているんですが、それ以外の季節に他の人が観光するところがあまりなくて……。

倉澤：文字通り「打ち上げ花火」で終わっちゃうんですね。

質問者C：それこそまちの人たちがなにか盛り上がっているコンテンツが毎週のようにあって、外から来た人もそこに参加できるような、なにか食えること以外に娯楽というか参加できるものがあるといいんですけど……伝統を押し続けてしまうと瞬間は盛り上がるんですけど、なかなか日常的にならない。特に新潟はそういうのが多くて、将来地元貢献したい気持ちがあるんですけど、コンセプトメイキングとかまちづくりはなかなか難しいと思っています。

石川：私が思うに観点が2つあると思うんですね。1つは継続ですね。要するに、千鳥ヶ淵は春に桜が咲きます。その時期以外はない。でも何年も続いていると、桜を待つし、それがあつ種の歴史を重ねていくわけですよ。千鳥ヶ淵には以前フェアモントホテルがあつて、新聞広告を貼り出していたんです。「千鳥ヶ淵の桜がまた咲きました、おいでください」。そうするとみんな待つ。長岡花火もあれだけ盛り上がっているのは、花火が素晴らしいということもさることながら、続けてるからですよ。その期待に応えている。春夏秋冬365日ずっと花火が打ち上がっているようなまちが本当にハッピーなのかというのは難しいですよ。リオデジャネイロでは40日がカーニバルであつの325日はカーニバルの後片付けや準備なんですよ。そういうふうに見えるのも、ずっと続けてるからなんです。オフの日もオンの日を支えているみたいなことを、みんなが思えるような工夫ができて、続けてるつてことが結構重要ですよ。

イギリス発の文化で「オープンガーデン」というのがあります。1年に1日、自分の庭を開放するんですよ。ナショナルガーデンスキーム (<https://www.ngs.org.uk>) という組織がそれを束ねていて、そこに自分の庭が載るというのはガーデナーにとってすごいことなんです。「私の庭、ナショナルガーデンスキームなの」というと「おおー！」みたいになるんですよ。審査もあるんですが、1年に1日だけだから、ガーデナーにとって負担にならないし、その1日だけの為にめっちゃやつて、満を持してオープンするのですごい庭になるんですよ。素人なのに。束ねている組織がいるから、スケジュールを配分できるんですよ。真冬はさすがにないんですけど、春から秋まで必ずどこかが開いていて、イエローブックっていうディレクトリがある。例えば、ロンドンで今日どこか開いているところはないかなつて探すといくつか開いている。大きなイベントじゃないけれど、園芸的に切り分けて1年のうち1日みたいな感じの負担の少ない範囲で個人に「自分ごと」にさせてしまうみたいなやり方は、時系列のイベントでも可能なんじゃないかと思つます。日本では、なかなか見ず知らずの他人を庭に入れることが敷居が高くて、定着しないんですけど。

倉澤：オープンガーデンの庭の紹介の冊子はどこの地域にも結構ありますが、イギリス的なオープンガーデンという感じは少ないかもしれない。

石川：大磯が結構有名で、いまでも続いています。あとは仙台。伊豆高原も一時期すごい頑張つていましたね。

倉澤：街路の植栽枡へ勝手に植えられたミニトマトがありました。育つまでに2ヶ月はかかるからその間は自分ごと化するし、採つてからドライトマトにして調理するとか、季節だけじゃない活用の工夫が可能ですよ。トマトはトマトの季節で収穫して食べるのはそんなに長くないかもしれないけれど、組み合わせることでいろいろできると思うんですよ。柿だつて、干しておけば冬にいろいろと使えるじゃないですか。そういう景色になる「園芸」に繋がる部分と、食べるというところを一緒に考えてプログラミングしていけばいいんじゃないかな。

あとは、さっきの石川さんの学生さんたちのああいうアイデアをいかに埋め込んでいくかとか、ああいうプレゼンテーション的な感覚で面白く伝えられるとかがすごい大事だと思います。

石川：ひまわりの種を持っているだけでまちが違って見えます。いかにまちが隙だらけ土だらけかわかります。ニッチを探して漂っているタンポポのような気持ちになってきて「あ、あそこにもある！」って。一回植えると完全にそこが自分のまちになっちゃうから、学生たちのメッセージも飛び交って「あっ！やられました！」みたいな悲しいメールがきたり、育ってるのをずっと撮っては送ってくるやつとかいて、すごい面白いですよ。自分にとって、切実な場所するのにいかに効果的かということがわかりますね。

紫牟田：その場所が自分のものになっていく、関係ができていくには植物ってすごくいいですね。

倉澤：自分がピンときたらやっちゃうことですね。自分でビジョン持ってやっちゃう。巻き込んでうまくいったらどんどん広まるし、やってもうまくいかなければまた新しくやればいい。

石川：河原除草式ですね。

倉澤：そう。ゲリラ的なタクティカル・アーバニズムですね。広告代理店的にいろいろ考えて企画を立ててじゃあやりましょう、というよりも、やって面白かったら広げていこうよ、というところから入っていったほうが、全体にまちづくり系はうまくいくんじゃないですか？

石川：今度は、109の前の花壇を45cm角に区切ってそれを個人で管理する、という実験をロフトワークが中心になってやるんですね。ちょっとお手伝いしてるんですけど、面白いですよ。

倉澤：まだ全然自分の中の妄想ですけど、街路樹や植栽柵に名前をつけて、ちょっとずつ「自分ごと」化して行って、それがオープンガーデン化してだんだんレベルが高くなるみたいなこともいいなと思っています。

石川：昔、現場で古いお屋敷を壊して新築にしたんですけど、すごいたくさん木があるので普通に工事すると枝を折ったりしちゃうんです。なので、全員、自分の担当の木を決めたんです。「渡辺工事課長の木」とか書いてある。そうすると「気をつけろ、気をつけろ」って言うてました。所長の木も、俺の木もありました。そうすると気になるからしょっちゅう行って自分で管理するようになります。

紫牟田：そういうことが、次世代のエリアマネジメントじゃないかと思うときがあるんですよ。管理運営みたいなものを金額換算するだけじゃなくて、自分のエリアとして所有していくというか、そういう意味で管理運営していくというのもありなんじゃないかなって。

倉澤：余談ですが、ミニトマトは強くて河原でもよく見つかるんです。強いんです。結構、実って赤くなっているのを河原で見ます。

紫牟田：さて、すでに終了時間を10分過ぎてますので、質問もこれで終わりにさせていただきたいと思います。最後に学長から一言お願いします。

左京：さっき倉澤さんのお話の中で、東京であつてもこれから人口が少なくなっていくと、自然との関わり方を気をつけないといけないと大変なことになるというお話があつたと思うんですが、これまでの人口が増えていく前提で切り開いていった歴史から、これから日本全体で人口が縮小していくなかで、自然との関わりをどうしていかなければいけないのかということ。今日の都会の渋谷の状況を見ていると、自然がもう一度帰ってくるというか都市に押し寄せてくるようなことって相当スケールを拡大してみないと想像力がわからないんだけど、でも、いずれそうなっていくというなかでどういうふうか……。

倉澤：それは本当にやってみないとわからない部分もあるし、すぐになにかやろうとしても土地の値段はそれなりに高いし、なかなかそれを森にしていこう人は出てこないと思うんですね。だけど、仕方なくそうになってしまう状況は想像できるので、それに対して何ができるかということだと思えます。じゃあ、どうしようかと考えるとなかなか思いつかない。松本でも駐車場や空き地が増えてきて、その傾向を変えていくのは難しいです。土地法とかも考えていかなきゃいけない。土地の所有権は強いからです。

左京：何かの事例では、日本よりも早くに人口減少の局面を迎えていて、都市をもう一度縮小していくにあたって部分的に森にしていくみたいな話を聞いたことがあつたんですけど、これから日本全体で使わなくなった土地をどう自然にしていくのかな、みたいなことを思いました。

倉澤：放っておけばなると思うんですけど、どうですかね。

石川：ドイツなんかはわざわざ森にしてもすごいことにならないんじゃないですか。日本はわざわざ

森にすると強烈なことになりますからね。やっぱり楽な管理を探さないといけないんです。楽に付き合えるやり方や空間の使い方やつくり方をどういうふうにするかという落としどころを決めるというようなことが、これから重要なんだと思います。

倉澤：雑草が1~2mというのは、たぶん僕が生きている間にも問題になってくると思います。いまでも問題になっているところがあります。放っておけば50年経ったら森林化していくと思いますが、雑草と雑木林とどっちのほうが大変ですかね。

石川：どの状態で維持するかによりますよね。草原状態で維持しようと思ったら、雑草のほうが大変ですよ。でも雑木林にしちゃったほうが維持という意味では楽だと思います。ただ、雑木林を放っておいたために遷移が進んでしまうと、いい感じの雑木林に戻すのは結構大変です。雑木林状態で維持するようなサイクルが出来れば、それが1番楽だと思います。どうしてそう思うかという、雑木林、いわゆる里山、農村の周りにあるような薪炭林として森林を維持してきた歴史が長いからなんですよ。長く付き合ってきた相手なので、そのノウハウを我々が持っているうちにだったらできると思うんです。完全に忘れてしまうとすごく難しくなっていくかもしれない。

倉澤：松本なんか周りに松がいっぱいあるんですが、松は煙がひどくて薪にはできないじゃないですか。いま松枯れで問題になっているんですが、松は何に使っていたんですか？

石川：たぶん肥料に使っていたんだと思います。葉っぱとかは。薪に使っていなかったかどうかはわからないですね。松は土壌が貧弱な時に最初に生えてくるんですね。木を切りすぎてハゲ山になってから生えてくるので、割と荒れた、というか資源を篡奪しすぎた結果の山なのかもしれないですよ。

倉澤：もともと松林だらけであったわけでもないと思います。松茸だって、人間が手を加えたからこそある。松茸はいい土だと生えてこない。

石川：因果な作物だな。

倉澤：今年は雨が降らずに一本も食べれなかったのです。

石川：そうなんですか！不作な時もあるんですか。

倉澤：やっぱり、雨が降らないと出てこないし、20度くらいで雨が降らないと出てこないですね。

左京：えー（笑）。話が尽きませんが、時間も過ぎているのでそろそろ終わりにしましょう。

紫牟田：今日は、「自然」というワードをめぐって、幅広い討議となりました。一筋縄ではいかない自然は、これからも考えていくべきテーマだと思います。また改めて深める機会を持ちたいと思いますが、今日は石川さん、倉澤さんをお迎えして、自然のスケールと見方、付き合い方のヒントをいろいろいただきました。面白かったですね！お二人ともどうもありがとうございました。そして、参加されたみなさま、ありがとうございました。